

覚せい剤を使用したことのある精神障がい者が 社会生活を営む中で心がけていること

梶川 拓馬

看護学講座 療養看護学ユニット

近年、薬物の乱用が社会問題の一つとなっている。多くの先行研究では、物質乱用障害者への継続的な関わりや支援体制、標準的な治療システムの確立の必要性が言及されているが、当事者の視点に立った研究はほとんど行われていない。そのため、過去に覚せい剤を使用したことのある精神障害者が、社会生活の中でどのようなことを心がけているか、また、どのような精神科的支援が必要なのかを明らかにしたいと考え、記述的探索的デザインによる研究を実施した。

研究データからは、3つのカテゴリー、8つのサブカテゴリー、42の代表コードを抽出することができ、当事者は覚せい剤の誘惑を日々感じており、葛藤しながらも懸命に日々を過ごしていることが明らかとなった。

血管内皮細胞 microRNA を標的とした動脈硬化治療戦略

足立孝臣

臨床医学講座 内科学ユニット

高齢化の著しい昨今において、動脈硬化性疾患が急速に増加している。動脈硬化は血管内皮細胞の炎症を発端とし、血管内膜下への脂質蓄積による血管径の狭小化をきたす。動脈硬化は、心筋梗塞・脳梗塞・慢性腎臓病・重症下肢虚血などの様々な疾患の基礎病態であり、現代日本における重大な健康問題である。これまでの医学では、スタチンや血圧管理による動脈硬化の予防は広くなされてきたが、現在においても動脈硬化を治療する手段は確立されていない。

マイクロ RNA は 21-25 塩基長の 1 本鎖 RNA 分子であり、遺伝子の転写後発現調節に関与する。マイクロ RNA はその標的 mRNA に対して不完全な相同性をもって結合し、標的 mRNA を不安定化するとともに翻訳抑制を行うことでタンパク質産生を抑制する。マイクロ RNA が介する転写抑制は、発生・細胞増殖および細胞分化・アポトーシスまたは代謝といった広範な生物学的プロセスに重要な役割を担うことが知られている。

発表者は、血管内皮細胞マイクロ RNA に着目し、動脈硬化における血管内皮細胞マイクロ RNA の役割を明らかにすることで、新しい動脈硬化治療の確立を目的としている。